Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

あきらめたら負け。限界に挑んだ「最多勝大関」の土俵人生

浅香山博之氏 Asakayama Hiroyuki

元大相撲力士（魁皇）

大関魁皇として活躍し、現在は親方として土俵の外で相撲界を支える浅香山博之氏。現役生活は23年間の長きにわたり、戦後最年長の大関として史上最多勝の通算1047勝をあげた。度重なるケガを克服しながら土俵に上がり続ける姿は多くの人々の胸を打ったが、「入門当初はこんなに長く相撲を取り続けるとは思いもしなかった」と浅香山氏は振り返る。

新弟子時代に脱走。未遂に終わり、「やるしかない」と覚悟を決めた

そもそも相撲は嫌いだった。

「小学生時代から相撲大会に駆り出されてよく勝ちましたが、相撲を取るのは嫌でした。15歳で友綱部屋に入門したのは、周囲の勧めを断り切れなかったから。新弟子検査では、落ちればいいのにとさえ思いました」

入門後も相撲を好きになれず、半年目に脱走を試みたこともある。だが、翌日には連れ戻された。

「逃げられないなら、もうやるしかない。覚悟を決めて、相撲に真正面から向かい合うようになりました」

新弟子時代はすり足や四股（しこ）など基礎的な稽古に明け暮れた。体ができあがっていくにつれ土俵で勝てるようになり、番付も少しずつあがっていった。

「この頃から手ごたえを感じ、相撲を取るのが楽しくなりました」

持ち前の「怪力」を生かした豪快な取り口は幕下時代から注目され、20歳で新入幕を果たす。スピード出世だ。ところが、新入幕場所は4勝11敗と大敗を喫し、翌場所は幕内から陥落してしまう。

「右上手を取れば強いという自分の型は、入幕時にはできあがっていました。当然、対戦相手たちは研究済みですから弱点を徹底的に突かれ、歯が立ちませんでした」

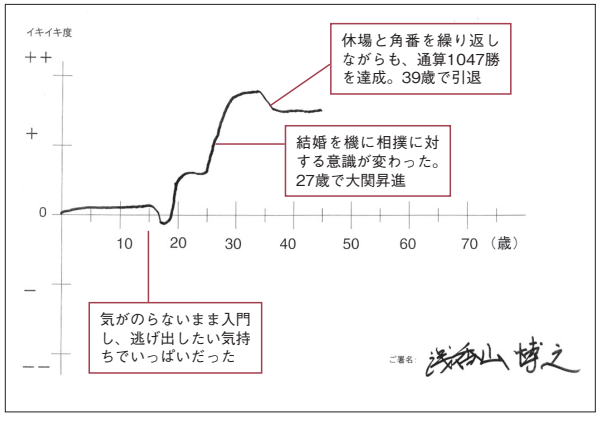
自らの力不足を痛感したが、十両に戻って出直すしかない。この時点で同期生の曙が横綱、貴花田（のちの貴乃花）が大関と、水をあけられていた。切磋琢磨する相手が身近におらず、魁皇にはどこか闘争心に欠けるところもあった。ここでよきライバルに出会う。「平成の怪物」と呼ばれた武双山（現・藤島親方）だ。

「武双山とは同じ昭和47年生まれですが、彼は幕下付け出しでデビューしたばかり。元横綱・輪島関以来の無傷での十両入りが話題になってはいたものの、自分が負けるはずはないと思っていました」

Career History　浅香山博之氏のキャリアヒストリー

1972年	0歳	福岡県直方市出身。体格は大きかったが、3人兄弟の末っ子で引っ込み思案な性格。中学で柔道部に入り、顧問の先生に相撲を勧められる
1988年	15歳	友綱部屋に入門。のちの若乃花、貴乃花、曙とともに春場所で初土俵を踏む
1992年	19歳	初場所に新十両に昇進。翌年の夏場所に20歳の若さで新入幕（十両の力士が初めて前頭以上の番付に入ること）を果たす
1995年	22歳	初場所に関脇に昇進、以降13場所連続関脇在位
2000年	27歳	夏場所で初優勝（14勝1敗）。翌名古屋場所後に大関昇進を果たす。横綱候補としても注目されるがケガに悩まされ、休場と角番（負け越した場合にその地位から陥落するという局面）を繰り返す
2006年	33歳	9度目の角番で迎えた春場所が不調で師匠から引退勧告を受けるが続行。勝ち越しを決める
2009年	37歳	11月の九州場所で元関脇・高見山の記録を更新する幕内在位98場所を達成
2011年	39歳	7月の名古屋場所で通算勝星史上単独1位・1047勝を達成し、10日目に引退を表明。引退後は年寄・浅香山を襲名し、後進の育成に尽力している

大関を決めた武蔵丸との一番



直筆の人生グラフ。自らの意思で選んだ道ではなかったため、入門当初はマイナスに。土俵で勝負を重ねるにつれ、相撲を好きになっていった。

Interview ＝ 泉 彩子、大久保幸夫　Text ＝ 泉 彩子（54〜56P）、大久保幸夫（57P）　Photo ＝ 臼田尚史
撮影協力 ＝ 東武ホテルレバント東京　取材協力 ＝ 日本相撲協会

だが、初対戦は完敗。武双山は翌場所での入幕を確実にし、その後も快進撃を続けた。その姿を見て奮起した魁皇は翌2場所連続で10勝し、再入幕を果たす。翌1994年春場所には横綱・曙に勝利して初金星を獲得。夏場所には三役（小結）昇進と、再入幕後は武双山の後を追うように番付を一気に駆け上がった。

ケガに悩まされ続けた30代。師匠からの引退勧告もあった

1996年春場所にははじめての優勝決定戦に出場。20代前半で体力的には絶頂期。以前は遠くを走っていた同期生とも同じ土俵で戦うようになると気力も充実し、その躍進ぶりに大関候補として周囲の期待が高まった。ところが、翌年の夏場所で全治2カ月の重傷を負い、引退までささやかれる状態に。結婚を機に意欲を新たにし、1999年春場所、夏場所と2ケタ勝利したが、大関昇進をかけた翌場所で負け越し。大関の座についたのは、新三役昇進から6年が経過した2000年秋場所だった。

「型に持ち込めば大勝するのに、プレッシャーに弱く、ここ一番で大敗する。マスコミから『強い魁皇と弱い魁皇がいる』と評されましたが、自分でもその通りだと思いました」

同じもどかしさを横綱への挑戦でも味わった。2001年の春場所で優勝し、横綱候補として注目されるが、夏場所は重度の腰痛で休場。その後も横綱挑戦のチャンスが巡ってくるたび故障で休場を繰り返した。それでも挑戦し続けたのは、ケガをのりこえて横綱として闘い続ける同期・貴乃花の存在に発奮したのも大きかった。その貴乃花も2003年に引退。残された時間の少なさを感じ、集中力が出たのだろう。2004年の九州場所（11月）では、11勝3敗で迎えた千秋楽で横綱・朝青龍に勝ち、横綱昇進がささやかれた。だが、取り組み直後に相撲協会から昇進見送りが発表された。

「事実上最後の綱取りとなりました。文句なしの成績を残せなかった自分が不甲斐なかったです」

その後は度重なるケガで休場が増えた。2006年初場所では6日目時点で2勝4敗と負けが込み、師匠から「もうダメか？」と言われた。事実上の引退勧告だ。

「でも、まだ納得がいかず、『負け越したらやめますから、そこまでは相撲を取らせてください』と答えました。ありがたいことに、師匠も理解してくれました」

通算最多勝達成を花道に引退。最後まで優勝をめざして闘った

「まだやれる」という思いは間違っていなかった。千秋楽で勝ち越し、引退の危機をのりこえたのだ。その後は腰、肩、太ももと故障を繰り返し、満身創痍だったが、あらゆる治療を施して闘い続けた。

「休場しか考えられないような体調でも、治療によってある程度改善され、また相撲を取れるというのが楽しみでした。そのうちに、自分の限界に挑戦してみたい、あきらめたくないという気持ちが強くなっていったんです。体力的にも精神的にも負荷は大きく、『もう引き際か』とくじけそうになったことは何度もあります。でも、応援してくれる人や治療をしてくれる人たちが自分以上に必死だったんです。その姿に励まされました」

引退を表明したのは、2011年7月の名古屋場所10日目。5日目に千代の富士の記録を超える1046勝の通算最多勝を達成。7日目に通算1047勝をあげた後、黒星が続き引退を決めた。後悔は何もなかった。当時39歳。昭和以降の最高齢大関であり、「幕内通算879勝」「幕内在位107場所」は歴代1位。記録到達までの道のりは注目されたが、「記録に興味はない」と言い続けた。

「記録を意識すれば、足がすくんでしまう。だから、目の前の一番のことだけを考えていました。最後までただ勝ちたかった。横綱昇格はもうなくても、常に優勝はするんだという思いで場所を迎えていました」

現役後期はひと足先に親方の仕事をする同世代の姿を見て、焦りを感じたこともある。でも、現役をやり切って経験した紆余曲折も指導の糧となると考えた。どっしりした体で穏やかに「自分の経験も生かしつつ、一人ひとりの弟子に合った指導をしたい」と語る浅香山氏。親方としてどんな手腕を発揮するか、今後が楽しみだ。

After
Interview

自分の「心」と「体」と闘い続けた
史上最強の大関・魁皇

大久保幸夫　ワークス研究所　所長

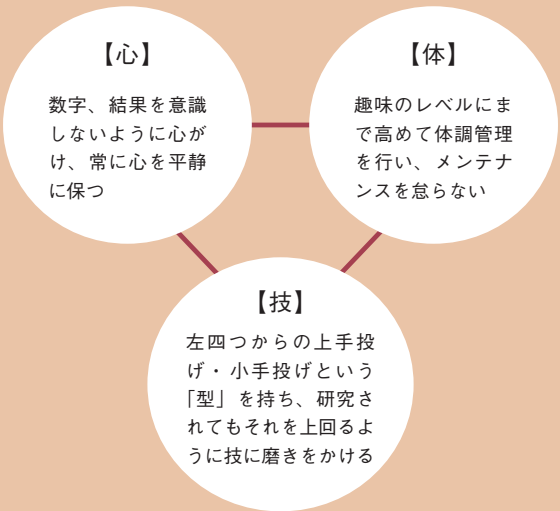
私は魁皇という関取の永年にわたってのファンだった。それは、魁皇がとてつもなく強いと同時に、とても弱い側面を持っていたからだろうと思う。だからたまらなく応援したくなるのだ。右上手を取ったら、上手投げ・小手投げで相手が横綱でも平気で放り投げる。まさしく「怪力」。そのくせ「今場所○勝したら大関」「今場所優勝したら横綱」となると、プレッシャーに負けて序盤でつぶれてしまう。もう無理となると開き直ってまた強い勝ち方をする。その繰り返しで、歯がゆいのだがたまらなく心惹かれるのである。

今回お会いして実感したのは、やはりその心の弱さと闘ってきた相撲人生だったということだ。晩年は千代の富士が持つ通算1045勝の記録を破るかどうかに相撲ファン誰もが注目した。現役を続けていればあと○場所くらいで到達するのできっとできるという声と、いやいやその前に大関を陥落して引退することになるという声とで、外野は大いに盛り上がった。しかし、彼自身は「数字には興味がない」というコメントを繰り返していた。相撲界の歴史に燦然と輝く大記録である。興味がないわけがないのだが、興味を持たないように自分自身に言い聞かせていたのだろう。それは1045勝という大記録を意識すると体が動かなくなるとわかっているからであり、仮に記録を達成してもその瞬間に脱力してそれ以上相撲を取り続けるモチベーションが働かないと知っていたからだ。

しかし、あと1勝というところまで来たときに、はじめて記録を意識して、どうしても勝ちたいと思った。そして「あの1勝が1047勝したなかでいちばん難しかった」と思うことになり、「達成したことでもう何もめざすものがない」と感じて引退したのである。

反対に体については徹底して意識して、体のメンテナンスを趣味の領域にまで高めた。

結果を意識しないという「心」との闘い、徹底して意識するという「体」との闘い。自分との闘いに勝って、魁皇は大記録を相撲界に残したのである。

彼の相撲を同じ時代にいて見られたことをとても幸福に思う。

大記録を生んだ元大関・魁皇の心技体